
僕の知らない親父の背中

アメメン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の知らない親父の背中

【Nコード】

N4132C

【作者名】

アメメン

【あらすじ】

駅で起こった小さな出来事が、忘れかけていた父親と自分の絆を再認識するきっかけになった・・・というショートショート。

「旭工務店さん！」

新宿駅で、ＪＲから京王線に乗り換える為に地下通路を歩いていた時だった。

突然、背後から声を掛けられた。

普段なら部外者の僕は、親父のやっている住宅リフォーム会社の名前で呼び掛けられても反応などしない。

ただ、ついさつき病院の待合室で同じように呼ばれたものだから、無意識の内に声のした方に振り向いて「はい」と答えていた。

京王線、小田急線、ＪＲ、３路線の乗り換えで混雑する雑踏の中で、声の主を特定するのは容易ではなかった。

包帯を巻かれた親父の姿が頭から離れない。ぼんやりしていたから、呼ばれたような気がしただけだったのだろうか。そう思った瞬間だった。

声の印象よりも年配のご婦人が僕の腕をポンと軽くはたいた。

「お宅の事務所・・・たしか南烏山だったわよね？」

彼女の探るような聞き方に、文句を言われるのでは・・・と思わず身構える。

「そうですけど・・・」

住宅のリフォームの場合、大抵の人が予算以上の要望を持っているものだ。

そして完成した後で、ああすれば良かったとか、こうすれば良かったと、後悔する人も少なくない。

客から出される無理難題に、電話口だというのにペコペコと頭を下げていた親父の姿が思い出された。

「社長さんの名前・・・たしか、緒方さんだったわよねえ？」

彼女は確かめるように言う。

嫌な予感がして、鳩尾の辺りにシクシクと締め付けられるような痛

みを感じる。

「ええ」

両手が塞がっているから、額の汗を拭うことが出来ない。

「よかったあ。去年、2世帯住宅にもらったのよね。お陰ですごく暮らしやすくなったの。秋には家族も増える事になって・・・違うわよ！・・・私じゃなくて息子の嫁」

そう言うのと、彼女は僕の視線を遮るように薄手のカーディガンの前を掻き合わせて、お腹を隠すような仕草をして笑った。

「社長さんのアドバイスに従ってキッチンを別々にしたら、お互い気を遣わなくても良くなったのよねえ。お礼に伺いたいくらいよ」

「はあ・・・」

緊張の糸が切れて、肩の力がスーッと抜けた。

僕が腑抜けに見えたのだろうか・・・後ろを通った会社員が、これ見よがしにカバンをぶつけて行った。

「あら、ごめんなさいね。こんな処で呼び止めちゃって・・・私、祖母谷大蔵の佐伯です。社長さんによろしくお伝え下さいな」

申し訳なさそうに会釈して、立ち去ろうと彼女は向きを変えた。

その時、彼女が何故、僕を旭工務店の人間だと断定したのかが気になった。

一流企業のエリート・・・という訳にはいかないが、僕は営業部でトップセールスを誇っている。

何時何処で誰に会う事になるか分からない。

急な呼び出しにも対応出来るようにと、普段から身なりには気を配っているつもりだった。

「あの、どうして・・・」

行きかけていた彼女が足を止めて振り向く。

「えっ？・・・ああ、そのヘルメット・・・社長さんも被っていたから・・・」

彼女は、僕の右手を顎でしゃくった。

僕は親父の荷物を持っていた事を、すっかり忘れていた。

病院からずっと、大きく旭工務店という文字が書かれた親父のヘルメットをぶら下げて歩いていたのだ。

「旭工務店という名前は、息子さんの名前から取ったんですってね。社長さん・・嬉しそうに話していたわ」

家路を急ぐ人の波は、僕を避けて右へ左へともものすごい早さで流れていく。

親父は僕が幼稚園に上がった年に、親方の元から独立して会社を作った。

息子の成長が仕事の励みになるから・・と、僕の名を会社名にしたのだ。

小田急線の改札の方へ押し流されていく彼女の背中に向かって「親父は・・僕の親父は、崩れてきた足場の下敷きになったんです」と叫びそうになった。

もしかしたら、もう、このヘルメットを被る事は出来ないかもしれない・・そんな弱気な考えが頭をかすめる。

このヘルメットを被り、埃や木くずにまみれながら、職人達の先頭に立って汗水たらして働いていた親父の姿を思い浮かべて、嫌な思いを振り払う。

もう見えなくなってしまうた彼女の背中に向かって「ありがとうございまして」と呟いたら涙が溢れてきた。

気がついたら新宿駅の・・それも地下通路の真ん中で、親父のヘルメットを胸に抱きかかえて子供のように泣きじゃくっていた。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4132c/>

僕の知らない親父の背中

2010年12月9日05時11分発行